

国際協力・異文化理解教育の実践に関する考察 —埼玉県A高等学校を中心に—

A Study on Educational Practice for International Cooperation and Intercultural Understanding: The Case Study of a High School in Saitama Prefecture

張 瓊華 ZHANG, Qionghua

● 国際基督教大学教育研究所

Institute for Educational Research and Service, International Christian University



Keywords 国際理解, 異文化理解, 実践, 機能

International cooperation, intercultural understanding, practice, function

ABSTRACT

国際化, グローバル化の進行に伴い, 国際理解, 異文化との共生が現代社会の大きな課題である。本研究は, 埼玉県の県立A高等学校の実践を取り上げ, 国際協力・異文化理解教育がどのように行われ, いかなる機能を果たしているかを明らかにするものである。

A高等学校では, 外国人をゲストとして招き, 講義をしてもらう形で国際理解や異文化理解の教育を展開している。そこでは, 学校の教師は, 主役ではなく, 助手役へと変わり, 授業内容のコントロールはしていない。生徒の学習は, 教科書中心からテーマ中心へと変わっている。このような授業に参加することで, 生徒は, 異文化的背景を持つ人々との触れ合い, 教科書にない知識の獲得ができ, 外国や異文化に対する興味・関心をもつようになる。またすでに持っていた知識やイメージを正すことができ, 自己再認識や, 自己反省, また自国への肯定あるいは批判をするようになり, 異文化理解, 国際協力意識が形成されるようになっていく。

As internationalization and globalization develops, international cooperation and intercultural understanding are becoming big issues. This study tries to clarify how the education for international cooperation and intercultural understanding is practiced and what function it has. These findings came from a case study of a high school in Saitama Prefecture.

Foreign guest teachers are invited to give lectures in the classroom, at this school. The guest teacher plays the leading role and the school teacher, only acts as an assistant. So the guest teacher is in control of the curriculum. The students study a theme which is not part of the textbooks. The benefits of this kind of education are that, the students can make contact with foreigners and can learn new knowledge. It makes them feel interested in foreign countries and foreign culture. In addition, it allows them to correct their knowledge or negative images. This is important for them to become critical thinkers, in assessing their own country and accepting foreign culture. This is crucial for international cooperation and intercultural understanding.

1 はじめに

国際化、グローバル化の進展に伴い、国際理解、異文化との共生が現代社会の大きな課題となってきた。日本ではそれに対応する教育が行われ、とくに2002年より「総合的な学習の時間」の導入とともに、そういった教育が小・中学校や高等学校により広く展開されるようになった。現状では、それをどのように行うかは各学校によって異なっている。本研究は、埼玉県県の県立A高等学校の実践を取り上げ、国際協力・異文化理解教育がどのように行われ、いかなる機能を果たしているかを考察する。

国際理解、異文化理解とは、異文化を学習して、異文化を知るだけでなく、それに対する「理解」と「尊重」が求められている。国際理解、異文化理解の教育を取り入れている学校は少なくないが、現状では、教科書もなく、専門の教員も配置されていない。何をどのように行うかは学校や教師によって異なっており、学校の裁量、とくに授業担当教師の裁量が大きいと考えられる。また佐藤(1998, p5)も指摘しているように、「これまで、国際理解教育においては、国際という側面を強調してきたが、理解という面はあまり注目されてこなかった」という知識の習得にとどまる教育に終始してしまう可能性があると言える。果たして国際理解、異文化理解は学校でどのように展開され、また生徒にいかなる影響を与えているのだろうか。これらの課題を明らかにする必要がある。

しかしこれまでの先行研究は、理念や目標の変遷に関する史的検討や国際理解教育に関する都道府県教委や指定都市教委の指針、指導資料に関する分析、そして国際理解教育に対する批判・提案は2002年から新教育課程にどの程度反映されているかに関する検討及び国際理解教育の実践例に関する紹介(張, 2004, p164)などがあるが、国際理解教育を生徒がどのように受け止め、どのように内面化しているかは検討されていない。そこで本稿は、埼玉県県立A高等学校の実践を取り上げ、まず、A高等学校における

実践を教師の役割と学習の内容から検討する。次に、生徒のレポートに基づいて、生徒の異文化に対する受容と内面化について分析し、そして国際理解や異文化理解教育の果たしている機能について考察する。

本研究は、筆者の2003年4月～2004年2月までの、埼玉県県立A高等学校で行った参与観察に基づいている。これはA高等学校3年生を対象に行われている選択科目の「国際関係」と必修科目の「現代社会」を週2回(場合によっては、週3回、4回)観察したものである。なお、埼玉県と当県のA高等学校を選んだのは、以下の理由による。埼玉県に在住する外国人数は県人口の1%を占める9万2千人に達し、その国籍は130か国を超え、地域での「内なる(?)国際化」は重要な課題となっており、そこでの国際理解教育の取り組みは国際理解教育の典型例の1つになると考えられるからである。また、県立A高等学校ではすでに1996年から「国際関係」の授業を設け、国際理解教育に取り組んできて豊富な経験が蓄積されており、国際理解教育が円滑に行われているからである。したがって、国際理解や異文化理解教育の役割を考察するには、埼玉県と埼玉県のA高等学校は格好の対象であると考えられる。

2 A高等学校における実践

ごく普通の教室で、机やイスが並べられている。生徒がそこに座る。前の方には黒板とスクリーンがある。教室の横側にパソコン一台と写真をスクリーンに映し出す機械もある。

外国人ゲストは教壇に立ち、スクリーンに映し出されている写真をさしながら、生徒に自国の文化や社会事情を説明する。授業担当教師は横側に立って、時々質問をする。これは、A高等学校での「国際関係」と「現代社会」(ゲストが来る場合)の授業風景である。

ゲストは、日本で勉強している留学生や、生活・仕事をしている外国人、海外で国際協力事業に携っていた日本人、そして以前「国際関係」

の授業を受けた卒業生のうち、実際に外国を見てきた人などである。

取り上げられた国は、中国、ドイツ、韓国、セネガル、マレーシア、インド、ブラジル、イギリス、カナダ、フランス、アメリカなどがある。

2.1 教師の役割-主役から助手役へ

A高等学校では、「国際関係」という選択科目のほか、「現代社会」の授業にも国際協力・異文化理解教育が取り入れられている。それらはゲストが講義する形で授業を展開している。では、授業担当の教師はどんな役割を果たしているのかを事例で見てみよう。

<事例1>「現代社会」の授業、テーマは「ドイツ」

授業の始まりで、科目担当のT先生：「はい、じゃあ今日はね、皆の授業じゃ初めてだと思うけど、えーと、ドイツから見たカリンさん。ではカリンさんのほうからドイツ語で、ちょっと・・・」。

ゲスト：カリンです。私はハンブルクから来ています。ハンブルクって、知っていますか？

T先生：（インターネットから世界地図を探し出して、スクリーンに映し出させながら）ちょっと地図でハンブルクの場所。みんな分からないみたいだから、ドイツを拡大しますね。・・・えーと、ハンブルク。もう少し大きくしないとだめですかね。ありました？ありましたね。ここですね。

ゲスト：はい。これでまず地理の場所・・・ちなみにドイツで大きな都市をあと3つくらい挙げるとしたら、どのへんになりますかね？

T先生：ドイツにある大きな都市で、みんなに知ってほしいようなのがありましたら、今ベルリン挙げましたよね、それからカリンさんが住んでいるハンブルク、あとどこですかね？

ゲスト：あと日本に行きたいと、フランクフル

トまで行かなくちゃ行けない・・・。

T先生：フランクフルトですね。フランクフルトはここですね。今飛行機でもドイツに行くとしたら、航空が多いと思うのですが、ここがフランクフルトですよ。

ゲスト：それでもし私、たくさんビール飲みたいなら、ミュンヘンまで行かなくちゃ行けない。

T先生：うん。うん。ミュンヘンね。ミュンヘンはもうちょっと南になりますね。えーと、まだみんな早いけど、中には早くない人もいるかもしれないけど、とりあえずビールの話はちょっとおきますけど、とりあえずどこでしたっけ・・・、えーと、ないな、もう少し南のほうでしたっけ？あ、ここですね。

ゲスト：ロマンチック街道はヌーンベルク、ミュンヘンからヌーンベルクのほうまで行かなくちゃならないのですよ。

T先生：えっと、ミュンヘンから？

ゲスト：ローテンブルク。

T先生：どのへんですか？

ゲスト：もうちょっと上で、もうちょっと右。はい。

かつての授業では、教師は教壇に立ち、教科書に沿って講義し、生徒はノートをとるという風景が一般的であった。しかしここでは、学校の教師は、授業を行うのではなく、ゲストの授業の助手として授業のお手伝いをし、授業が円滑に進められるよう役割を果たしているにすぎない。

2.2 教師の役割-内容のコントロールから問題の提起へ

通常の授業では、教師はその日の授業で何をどのように教えるかを教科書に沿って事前に準備し、生徒に伝達する。教師自身は内容を把握し、授業をコントロールしている。では、ゲストに講義してもらった場合はどうであろうか。

<事例2>「国際関係」の授業、テーマは「マレーシア」

ゲストはタンさんという方で、マレーシアからの留学生である。彼はまず、マレーシア語、英語、中国語、日本語のそれぞれを用いて、自己紹介した。

T先生：いろんな言葉を話してもらったけど、何で4ヶ国語が話せるのかちょっとそのマレーシアの話からちょっとだけして見てください。

ゲスト：（スクリーンに映し出されている地図を見ながら）マレーシアはですね、ここは日本ですね。マレーシアは東南アジアというところの地域のど真ん中にありまして、古く15世紀からマラッカ海峡があるおかげで、日本、中国からヨーロッパに売るためにならずここを通らなければならないし、で、もちろんヨーロッパの商品もこちらに来るのにマレーシアを通らなければ行けない、重要などころになっているのですね。だからマレーシアはそういう意味で東の文化と西の文化が混ざり合っ、今でもそういう風なことが言えるんですね。歴史的にはイギリス植民地、イギリスの支配がもっとも長く、それ以前はポルトガル、オランダ、そしてもちろん日本の支配も受けました。イギリスの支配がもっとも長かったから、マレーシアには英語が第二国語として意識しているのですね。もう1つはマレーシアという国でいろんな民族、歴史的な背景があるから、いろんな民族がそれぞれの言葉を使っているから、言葉が通じなかったりすることがあるのですね。たとえばみんな日本人は中国に行って、中国語がわからなかったり、相手は日本語がわからなかったりすると、どうしようもないんですね。じゃあ1つ統一した言葉を作ろうかっていうことになって、マレーシア語が

できたんですね。それはマレーシアを代表する言葉です。イギリスによる植民地支配が300年くらい続いていたため、英語のできる人も多い。この2つの言葉がマレーシアの小・中・高で流行っています。で、そのほかに、中国系の人だと中国語、インド系の人だとヒンズー語という授業はあります。その授業で自分の言葉を。いろんな言葉があって、私は華人だから必ず勉強しなければいけないのはマレーシア語、英語と中国語です。学校で勉強するのはこの3つの言葉で、もちろん私の祖父母は福建というところから、福建というところの言葉がしゃべれます。もう1つは広東省から来た人達が多いから、マレーシアでは広東語を使っている人も多い。私ももちろん広東語もしゃべれます。だから日本語を付け加えて、6ヶ国語しゃべれます。

T先生：いろんな話いっぱいあると思うんだけど、一応みんなにもリクエストを聞いたほうがいいんで、皆が聞きたいと思うんだけど、あの主としてマレーシアのほうの話を聞きたいか、それとも日本に来て留學生活のいろんなビデオで話したような感じ、そっちのほうを重視するか、一回しかないんでね、どちらに重点的に話を聞きたいか、ちょっと聞きたいと思うので、みんなの意向を聞いてそれでタンさんに選んでもらうと。じゃあマレーシア中心で話をしてほしいっていう人は手を挙げてくれますか？はいじゃあ、日本の滞在経験を中心に話して欲しいって人？うーん、ちょうどこのくらいですけど。じゃあタンさんの自由なほうで。どちらでも。

ゲスト：難しい・・・。じゃあできる限りこの2つを紹介して、マレーシアのことはですね、時間的にはちょっと難しいか

ら、マレーシアのことを絡みながら日本の滞在経験を、できればねいいなと思っています。

T先生：学校を話して欲しい人？何回挙げても構わないからね、学校はいい？はい、一人ね。次は、生活様式。はい、じゃあ一番多いですね。これでいきましょう。

ゲスト：生活様式なんですけれども、マレー人はですね、宗教的な関係からマレーシアの人達は生活していくうちに持っている信念は宗教とすごく近いことになるんです。まずそれが1つ日本と全然違うことなんです。まあマレー人は何の宗教を信仰しているかを当ててもらおうんですけど、誰かこれじゃないかなど？

T先生：マレー人は何の宗教を信じているかと……

(生徒はキリスト教、仏教、ヒンズー教などをあげた)。

ゲスト：実はイスラム教ですね。彼らには法律、普段私達が使う一般法律のほかに、回教法律があるんですね。彼らはこの2つを合わせながら生活してるんですね。まず、……。これがですね、お寺です。特別な名前がありましてモスクと言います。これには女性は入っちゃいけないです。女性は入ってもいいですけど、こういうような服装、髪の毛を見せない、自分の肌を見せないようにしなくちゃいけないですね。女性が入っていいというのはイスラム教の女性じゃなくて、観光客が入ってもいいというふうに最近はなってきました。観光客の女性も髪を見せないように、長い服装を着て肌を見せないように中を参拝するようになってきましたけれども、イスラム教の女性は依然として中に入っちゃいけないですね。で、男性だけが礼拝するなんですけど、外側に蛇口がありますので、手を洗って足

も洗って、きれいにしてから中に入ります。みんなはメッカに向かって礼拝するんです。これは一日5回やります。で、それぞれの時間帯に礼拝の呼び名がありますけれども、それは難しいので今日は飛ばします。で、どういう時間帯かといいますと、太陽が昇ってくる日の出前、日の出ちょうど、お昼、日の入り直前、日の入りあとこの5回ですね。そうすると仕事の面でみなさんは大変じゃないのかなと思うかもしれないけど、マレー人がいるところで、働いている場所では必ず小さな部屋を設けて、その時間帯になるとそこに入ってきます。で、これはマレー人の生活様式です。

T先生：ちなみにマレー人はどれくらいの割合ですか？

ゲスト：53パーセントです。で、彼らの食べているものはココナッツミルクが入ったものが多くて香辛料も多いです。代表的なのはサッテという焼肉じゃなくて、焼き鳥です。もう1つはカレーです。彼らはイスラム教だからお酒を飲めません。飲まないんじゃないって飲めません。豚肉も食べません。はい、……。ということですね。

以上から分かるように、教師は授業を円滑に進められるように、問題を提起するが、ゲストが具体的に何をどこまで説明するかといった内容まではコントロールしていない。つまり、授業の流れはある程度コントロールしているものの、内容のコントロールはしていない、ひいては、コントロールできないという状況である。

2.3 生徒の学習-教科書中心からテーマ中心へ

一般的に学校での学習は、一定のイデオロギーに基づいて編成された教科書に沿って進める。この場合、教育知に自国の全体社会のイデオロギーや基本的価値観が潜在しており、つまり、

教育知が統制されているということである。そういった中で国際協力・異文化理解の教育が行われていても、学生に伝達されているのはやはり自国や自民族の価値観に過ぎないのであろう。

では、A高等学校はどのように国際協力・異文化理解の授業に取り組んでいるかをいくつかの事例で見よう。

<テーマ1> 「ドイツ」

ゲストは「国際関係」の授業を受けた卒業生であり、ドイツにホームステイに行ってきた、自分の目で見たドイツを紹介する。

インターネットからドイツの地図を捜し出し、スクリーンに映し出して、どこに行ってきたかを説明した上で、撮ってきた写真を生徒に見せながらどんな人に会ったのか、どこを見てきたかを説明する。紹介されたのは、第二次世界大戦の強制収容所、環境政策と家庭でのゴミの分類、学校の様子、徴兵制などである。卒業生は強制収容所でドイツ軍が第二次世界大戦中に行った残虐行為の跡を見て、同じ時期に同じような残虐行為をした日本の歴史を思い出したという。ドイツでは第二次世界大戦の時、ドイツが周りの国に対してどんなことをしたかを学校で6年間かけて教えるという。これは日本とは対照的なことである。日本では現代史の教育に重点が置かれていないため、歴史、または社会の授業内で日本の加害の歴史に触れる機会は少ない。戦争の悲惨さ、日本軍やナチスによる残虐行為、これらを忘れてしまったら、人間は再び同じ過ちを繰り返してしまうのではないだろうか。自分の国が犯した過ちは、本来なら隠してしまいたいことだが、それをはっきりと認め、次の世代に伝えているドイツの姿勢から日本は学ぶべきことがあるだろう。自分の国が犯した罪を受け止め、傷つけた人々に謝罪し、戦後補償をきちんと行う。そして、負の遺産として残し、過ちを伝える。このように正面から加害の歴史と向き合っこそ、周りの国とも本当の友好関係を築くことができるだろう。日本も近くのアジアの国々ともっと手を取り合っていくた

めにも、歴史と向き合い、過ちを後世に伝えていくことが必要である。

その他、ドイツの環境対策や徴兵制、学校の風景についても紹介した。

<テーマ2> 「中国新疆ウイグル自治区」

ゲストはザイドンという方で、中国新疆ウイグル自治区からきた留学生であり、日本の大学院で環境システム学を専攻している。「現代社会」と「国際関係」の授業で話をしてもらった。

写真とパワーポイントを使って、新疆の地理、自然環境、食文化、民族習慣、とくに砂漠化の問題について話した。ザイドンさんの住むウイグル地区は中国の北西部にあり、中国の面積の六分の一（日本の4倍）の広さで、砂漠は日本の大きさぐらいある。町は日本のように高層ビルが建ち並び、空港もある。砂漠はとにかく広く、ザイドンさんが来日した時日本はとても狭く感じたという。日本と中国との時差は1時間であるが、ウイグル地区と北京との時差は2時間もある。新疆は八カ国と国境が接している。人々の家はとても広い。家のすぐ隣には果樹園があって、農家の人々が集まって果物を食べる。葡萄の栽培が有名である。自然がとてもきれいである。ここには世界で2番目に高い山と最も長い内陸河がある。暑い時では気温が80℃まで上がり、寒い時では-30度にまで下がる。砂漠化の問題は、なかなか解決できず、拡大しつつある。できることと言えば、まず家の周りや村の周りから樹を植えていくことだという。しかし、せっかく植えた樹が少し大きくなったら、誰かに切られ、町まで運ばれ、燃料として売られてしまうことがある。それは、子どもの教育費を支払うために悪いことだと知りながらも、仕方なくこっそりとやってしまうことだという。したがって環境を守るためには、先に豊かにならないと無理だという。

このように、A高等学校では、教科書を使わず、テーマ中心に授業が進められている。生徒が外国人や外国を見てきた人の目を通して、外国や

異文化を見ながら共感を(覚える)。ここでは、自国の固有の価値観やイデオロギーに縛られることなく、世界を見ること、問題を考えることができるようになってきているといえよう。

3 生徒の受容と内面化

国際化やグローバル化に伴って、人の国境の越えた流動が多くなっているにも関わらず、現状では、外国人が近所に住んでいても、あるいは同じ車両に乗っていても、繁華街で見かけても、接触・交流することはほとんどない。しかし、教室に来てもらうことによって、話を聞くことができ、質問にも答えてもらえる。コミュニケーションを取ることによって、お互いの存在、考え方を確認することができると考えられる。つまり、学校は異文化的背景を持つ人々との触れ合いの場であり、異文化に接触する場となるということであろう。

それでは、外国人ゲストによる授業を受けて、生徒がそれをどのように受け止め、内面化しているのかを学生のレポートを通して、生徒の視点から見よう。

3.1 異文化的背景を持つ人々との触れ合いができる

「現代社会」や「国際関係」の授業で、ゲストの話聞いて、生徒は次のような感想を書いている。

(井口、現代社会レポート：韓国) 普段の生活の中では、あまり外国人と触れ合う機会がないので、このような授業で外国の文化に触れ合うことができ、これからの国際社会に必要な知識を得ることができたと思う。日本のテレビ番組などで紹介されている外国の様子と実際の様子は違うので、これから気をつけなければならない。

(若木、国際関係第3学期学年末レポート) この授業で、たくさんの国の方と直接触れ合って、一番感じたことは、どの国も、その国の独自性があることである。世界にいくつもの国が

あるように、いくつもの生活、食事、習慣が存在していて、その1つ1つを知る度に、意外性を感じたり、共感したり…。たくさんの国のことを知って、日本と比べたりした。自分の国では考えられないことが他の国では起こっている。そのことを理解し合い、お互いを知ろうとするのが国際交流の第一歩だと気づきました。

(櫻村、現代社会レポート) 韓国の学校では授業が朝6時から午後3時まで行い、生徒が夜遅くまで学校で勉強しているなんて、韓国の学生達はすごいなと思いました。それから、韓国料理は、日本料理とはまた別の華やかさがあって、とても美味しそうに見えました。韓国の自然もとても美しい。韓国にはますます行ってみたいくなりました。そして、外国人を招いた授業全体を通して、色んな国の文化をたくさん学んだなと思いました。それからお話をいただいている人達は皆暖かい人達でとても親しみを覚えました。国際文化交流はとても大事なことだと思う。

生徒は、ゲストに来てもらうことによって、外国人との触れ合いができる。それを通して、普段の生活環境では知ることもない異文化を学んだり、外国に関心を持ったり、国際交流の一步を踏み出したりするようになった。

3.2 教科書にない知識の獲得

外国人ゲストが来ることによって、さまざまな話が聞けることで、多くの知識を習得できるといえよう。

(内田、国際関係第3学期学年末レポート) 1年間で学んだと思ったのは何といっても「知識」でした。今までどこにあるのかさえ分からなかった国のことや人のこと、生活習慣、政治、宗教など本当に色々学びました。セネガルのことを学ぶ前では、セネガルがアフリカ大陸の一番西にあるなんて知らなくて、発展途上国ということさえ知りませんでした……

オーストラリアはほとんどが砂漠で、人が住んでいるのはほんの一部だけで、野生のカンガルーなどは都市から少し離れると見られるというのを知って、オーストラリアに行ってみたくになりました。

(関山, 国際関係レポート: インド) インドには、多くの民族や言葉がある。なんと、国内で1500もの言葉が使われている。日本に住んで、日本語と英語と何種類かの方言を知っているだけの私にとって、これはとても想像もつかないし、信じられないことであって、本当に驚いた。宗教は、主にヒンドゥー教が信仰されている。その次にはイスラム教である。今は禁止されているが、田舎の数少ない地域では、今でもsatiシステムが行われている。これは、死んだ夫を火葬する火に妻も一緒に入るという。私達にはとても考えられないシステムである。インドの知らなかったことがいっぱい知ることができて、とてもよかった。

(平井, 国際関係レポート: 中国) 中国人と触れ合うのは、私の17年間の人生で初めてであったので、ワクワクドキドキでした。中国の重点高校の高校生が朝5時半頃に起床して勉強している。いま、受験生になった私にとって、すごく焦りを感じさせた。中国人は勉強しすぎているとも思いました。しかし、学校生活は話を聞く限り、とても楽しそうだ。この日の話では、中国では貧富の差が激しいことが分かりました。表しか見えていなかった私は、中国は日本みたいにほとんどの人が豊かな生活をしていると思った。しかし、話によると、同じ会社でも給料の差は20倍以上もある。中国は広いせいか、南部、北部、チベットなど、地域によって食べ物が異なっているのも印象的だった。中国のことを教科書に載っていない部分を聞けたところは、自分にとって大きな利益だと思う。やはり、体験した人の話を聞くと、とてもリアルだから、惹きつけられる。写真を使って話してもらったのが分かりやすくよかった。これから、もっともっと外国人と触れ合っていきたい。同年代の外国

人の友達を作るのが目標である。

このような場で、教科書に載っていない知識をその国の人から聞いて、リアルだからこそ、話に惹きつけられ、知らずのうちに関心・興味を持つようになっていく。そして、教科書にない知識だからこそ、潜在的な価値観や判断基準に縛られることもなく、ありのままを受容することができるのであろう。

3.3 興味・関心が引き出される

外国のことや異文化に興味や関心がなければ、進んで接触したり、勉強したりすることもないだろう。ではこのような授業では、生徒の国際協力や異文化理解への興味や関心が引き出されるのであろうか。

(青木, 第3学期学年期末レポート) 「国際関係」の授業で招いた外国人は一学期から合わせて23人、外国での体験談を話してくれた人は4人でした。外国人が来ないほうがめずらしかったこの授業で、その国々の文化や習慣、今の状況など、色々な面で教えてもらいました。また写真や本などを見せてもらったりと、今までに興味のなかった国にも興味を持つようになったり、その国々の印象を変えたりと世界への視野もとても広がったような気がしました。

(田口, 現代社会レポート) 三年生になって、外国人を招いた授業を通して、色々なことを学びました。今までは他の国の文化や生活などにあまり興味がなかったけれども、授業を通してもっと知りたいと思うようになりました。

(山田, 現代社会レポート) 韓国はとても近い国なので、テレビでもよく聞くし、韓国の人もたくさん日本にいるから、大抵のことは知っていると思っていたけど、実際に話を聞いてみると、まだまだ知らないことはたくさんある。受験の話などは身近な話題なのでとくに面白かった。もう少し韓国について正しい知

識を学んでみたいと思うようになった。いままで、アジア、アフリカ、ヨーロッパなど色々な国や大陸の人に話を聞いてきて、やはり文化の違いはとても大きいものがあると思った。これから国境を越えた付き合いをもっと活発にしていくべきだと思う。そして、戦争などはなくなり、人類全体が仲良くしていけるようになってほしいと思う。

(長谷, 現代社会レポート) 身近の国でありながら、なかなか親しくなれなかった韓国。歴史的にみると、かつての日本は韓国を支配したり、虐殺を犯したりしてきた事実を消すことはできない。しかし、今日では徐々にではあるが、関係が向上してきている。人種的にも言葉や文化的にもとても共通点がある日本と韓国。是非我々の世代でよい関係に持っていきたいと思う。今回の授業では、上のようなことを改めて考えさせられるよい機会になった。今後自分達のすべきこと、態度は心得ているつもりなので、それをうまく生かしていきたい。

このように生徒は、ゲストによる授業を通して、今まで関心のなかった国に関心を持つようになり、興味のなかった異文化に興味を持つようになり、自分達の世代で隣国との関係を改善しようと思うようになっていることが分かる。

3.4 持っていた知識やイメージが正される

外国や異文化に関して、学校教育やマス・メディアの影響ですでに一定のイメージが形成されていると考えられるが、外国人ゲストを通して見た外国や異文化に出会うと、それらは変わるのであるか。

(中村, 現代社会レポート) 外国人を招いた授業全体を通して、学んだことはその国に対して初め持っていたイメージと話を聞いた後の自分のイメージは全然違っていた。どう違っていたかというと、セネガルの国は水や食料もないほど飢餓が進んでいるというイメージを

持っていたが、話を聞くと、とても自然が豊かで心が豊かに暮らしているというよいイメージに変わった。モンゴルでは、草原しかなく本当にモンゴル人は幸せなのかと聞いていたけど、話を聞くと、家族の絆が深く、風景がきれいだと分かった。このように、自分が持っている先入観というのは、悪いイメージが多いなと思った。先入観だけでその国の良し悪しを決めるなんて、その前に色々な国をもっと知ることが必要だと思う。私達が抱えている北朝鮮へのイメージにしても良いイメージはない。それは、私達が先入観に頼ってしまうからだと思う。先入観というのは人・国・文化などの良し悪しを決めてしまう第一の印象だ。しかしそこで止まらずその国を知るといふ第二の作業をすることが大切ということが分かった。なぜならそこに新しい境地があるからだ。

(近藤, 現代社会レポート) 今までたくさんの外国人のお話を聞いて、私の知らない外国のことをたくさん学びました。特別調べたりしたわけでもないのに、私は「この国は生活が苦しそう」だと勝手に思っていたけれど、決して私が思っているような国ではなく、素晴らしい国ばかりでした。

この2つの感想から分かるように、外国人ゲストの授業を受けることによって、生徒は知らずのうちに形成されていたイメージ、しかも悪いイメージを正すべきだと悟ることになり、さらに、ほかの国に対して持っていた悪いイメージも先入観によるものだと気づくことになっている。つまり、先入観を改め、外国や外国の文化を知ろうという気持ちに切り替えることができるようになったということである。

3.5 自己再認識, 反省

外国人ゲストとの触れ合い、交流を通して、生徒自身はどのように変わって行くのであろうか。

(小山, 第3学期学年期末レポート) 国際関係の授業を受けて最初に学んだと思うことは、自分達がどれだけ自国のことに関して無知であるかである。一年間通してさまざまな国々の方のお話を聞き、その国の文化、特徴などを聞いた時に、逆の立場になったら、と考えていました。もし自分が外国に出て、日本の事情や文化を説明することになったら、自分は何を言うのだろうか。いや、何を言えるのだろうか。考えても全然分からなかった。文化と言っても、自分の知っている文化はさまざまな外国の文化が入り混じった文化に近い。言っても食事に関することぐらいだった。自国のことを知らないことがどれだけ恥ずかしいことか思い知らされた。交流の最初の一步はお互いを知ることである。相手から教わったら、今度はこちらの番だ。相手に自分、自国を知ってもらうためにも、もっと日本のことを知る必要があることを学んだ。そして、積極性の重要性も学ばせてもらった。日本人は成長するにつれ周りのことを気にしすぎて、自己の意見を主張できなくなっている。でもそれでは自己の意見を強く持っている外国の方とは交流にならない。話をただ聞き、適当に分かったふりをするには誰にだってできる。そうではなく、話の中で分からないこと、興味があることは、もっと積極的に聞くべきなのだ。そうした積極性が交流を深めることにもなる。今後の国際化に向けてもっと自分を開放していくことの大切さを学んだ。

(青木, 第1学期期末レポート) (外国人が)日本人よりも日本の文化に詳しい。童謡や和歌などの文化に触れている人もいて、それを聞くと同時に自分達日本人がとても恥ずかしく感じました。私達は自分の国の文化をよく知った上で、ちゃんと理解しているのだろうか。自分の国の文化に興味を持たずに暮らしている人も少なくないでしょう。国際関係の授業でも実感したが、私達は自分の国を知らなすぎるのだ。外国へ行って日本のことを聞かれた時、ちゃんと答えられるように自国の文化

にきちんと触れておくべきだと思うようになった。

(加藤, 第3学期学年期末レポート) 国際関係の授業の討論会に参加して、自分の考え方を換えさせられた。まず始めにイラクへの自衛隊派遣問題についての討論を行った時、日頃社会情勢に全く興味・関心を持っていなかったため、答えることができなかつたことを恥ずかしいと思いました。自分の国とは関わっていない他国の人々でさえ自分の意見をきちんと持っているのに、私は自国のことなのに何も考えていなくて今まで生きてきたことを実感させられた。もっと世界に目を向けて、何事にも疑問を抱く大切さを学ぶことができました。

(原口, 第1学期期末レポート) 外国の人々は、日本人よりも家族の絆が深い。外国の人々は家族をととても大事にしていて、私の場合ですが、親が心配するのをわずらわしいと感じ、姉や妹と会話するのも面倒だと感じてしまう。なので、外国人の自分の家族に対する愛はすごいものだなあと感じました。自分を生んで育ててくれた人に対する感謝が足りないかなと、反省させられました。

これらの例から分かるように、生徒は外国人が日本のことや日本文化をよく知っているのに、それを知らない自分を恥ずかしく思う。自国をもっと知るべき、自国の文化に興味を持つべきだと反省するようになっている。同時に、交流する際に積極性の重要性をも認識するようになっている。そして、家族に対して愛を持つべきだと反省するようになっている。

3.6 自国への肯定や批判

それでは、こういった形の教育を受けて、自分の国に対する見方も変わったのであろうか。次にそれらについて見てみよう。

(佐藤, 第3学期学年期末レポート) 一年間授業を聞いてきて、日本は豊かで平和な国だとす

ごく思いました。物は選べないくらい溢れているし、食料も水も電気もガスもみんな揃っている。こんなに幸せな国なのに私は日本が他国にも幸せを分けようとはしていないと思っている。見て見ぬふりしているのである。世界で戦争や紛争が絶えません。飢え死に、食料不足・・・アフリカではしょっちゅうあることである。私は、日本人でよかったと思っているし、日本を誇りに思っている。その理由の1つに“平和”であるからというのが。今のアメリカを見て、果たしてあの国が平和であると言えるでしょうか。私は戦争や紛争で人が犠牲になるのを、今何よりもなくしたいと思っているし、最善を尽くすべきであると考えている。そのためには、日本がもっと“平和”がどういうことであるのかを世界に見せるべきだと思うのである。とくにアメリカには言わなければならないと思う。日本にとってアメリカはいろんな意味で大きな国であるけれど、日本がしっかりしなきゃ他の国を救うことはできないと私は考えている。

(黒田、第3学期学年期末レポート) 外国とは無縁だった私だけと、この授業のおかげで、本当に視野が広がった。この授業で外国人との生活の仕方や考え方の違いなどを大きく感じた。私が一番打撃を受けたのは韓国との以前の関係だ。今まで知らなかったことをすごく恥ずかしく思った。その時から私は日本国内だけでなく外国との歴史的なつながりもこれから生きていく中では知らなくてはいけないと思った。日本がしたこと、されたことを理解することから、これから成り立っていくのだと気づかされた。今となっては消えつつある過去の事実でも被害者側からすれば絶対に消したくないし、日本も忘れたふりをしてはならない。そのためには正しい教育が必要だと思ったし、私達も学ぼうとする姿勢が大切だと思う。

このように、生徒は自己反省のほか、自分の国を誇りに思い、他の国に比べたら、自分の国

が豊かで平和的であると肯定すると同時に、他の国に幸せを分けようとするともなく、戦争をしている国をも救わない自国を批判している。また、現在の歴史教育に対しても批判している。

3.7 共生意識の芽生え

国際理解や異文化理解の教育は、民族を越え、文化を越え、国を越え、共生意識を育むことを目指しているのであるが、実際にそのような共生意識は芽生えるのであろうか。

(鶴間、第3学期学年期末レポート) 世界には、たくさんの国があり、たくさんの文化があるが、私が授業を受けて驚いたのは、「一国内でも文化の違うところはたくさんある」ということである。日本でも、東京と京都、沖縄は違う文化を持っているが、ではこの地球上には一体いくつの文化があるのだ?と思った。自国から見た時、他国の文化に対して嫌気がさしてしまうこともあるかもしれませんが、しかし、大切なのは「好き嫌い」ではなく、「認めること」だと思う。好き嫌いは誰にでもあることだ。けれど、いくら嫌でも、「認めること」をすれば、国同士はもっと仲良くなれるのではないかと思う。次に、外国人の方のお話で必ずあったのが、「歴史」、とくに戦争の話である。私が見てきた国の中で、過去に戦争のなかった国はありませんでした。私が一番印象に残っているのは、ドイツのナチス政権のことである。ユダヤ人を大量に殺し、政権は何を思っていたのか。また、ユダヤ人はどんな気持ちで死んでいったのか。それを知るために、私はいつかドイツへ行きたいと思っている。世界中で、戦争は起っていました。だから、世界中の人が、戦争の辛さ、恐ろしさ、悲しさを知っているはずである。なのに、どうしていまだに戦争がこの世界から消えないのか、と疑問を感じる。大切なのは、歴史の真実を知り、戦争の恐ろしさを知り、二度と戦争の起こることのないよう、後世へ伝えることだと思う。

(平井, 国際関係レポート) (ブラジル, 中国新疆, インドの話聞いた後) 世界の国々は自らの宗教をきちんと持ち, 国に大きな影響を与えているということが, 社会の授業で学んでいながらも, 改めて勉強になりました. 日本は信仰している宗教もないので宗教問題はないが, 外国ではとても大きな問題であることに驚きました. 宗教の違いで戦争をしている. お互いの宗教を理解し合い, うまく共存できればいいなと思う.

生徒は, 異文化に関しては, 嫌いであっても, 認めることが必要であることを認識している. また, 戦争をやめるべきだとも考えている. そして, お互いの宗教を理解し合えば, 共存できると願っている. このように, 文化や宗教の違いを認め, 戦争を起こさず平和による共存という共生意識は芽生えていることが分かる.

3.8 国際協力意識の形成

では, 国際協力意識の有無から見た場合はどうであろうか. あるとすれば, 国際協力のあり方をどのように考えているのでであろうか.

(黒巢, 第3学期学年期末レポート) 私は, この授業の中で「青年海外協力隊」の人の話にすごく感動し刺激を受けた. 日本国内にそのような活動を行っている人たちがいることを全く知らなかったからだ. イラクだけでなく世界にもっと困っている人がいるのに・・・と思っていた. 青年海外協力隊の具体的な活動を聞き, すごく大変だと思った. その地の人達と生活し, 最も必要な援助とは何かを考える. そして一時的ではなく, その援助を継続する. これほど根気のいる仕事はない. でもすごく楽しそうに話をしてくれた. 自分の仕事に誇りを持っているからだと思う. 世界の中には多くの恵まれない生活をしている人がいるのに, 私達のような一般人はつい他人事として目をつぶってしまう. でも日本の中にその地域の人達と実際に触れ合い援助している人が

いることを知り, 私達にももっと何かできるだろうと考えるようになった.

(鶴間, 第3学期学年期末レポート) 国際社会での日本の役割は何か? と考えた時に, 日本は先進国であり, 世界唯一の被爆国でもある. 先進国にできることは, これ以上の便利さを求めないことである. いくら便利なことでも, 車の排気ガスのような, 「害」が出ることなど, 便利とは言えないと思う. 先進国だからこそできることを見つけて実行すべきである. また, 唯一の被爆国だからこそ, 平和主義の国だからこそ, できることがあるはずである. 日本はこの2つのことを念頭において, 国際社会において何ができるか考えていくべきである.

生徒は世界に目を向け, 困っている国に対して現地の人が最も必要な援助をし, それらを一時的ではなく, 継続的に行うべきだと思う一方, 自国にも目を向け, 環境のためにこれ以上便利さを求めないこと, 平和主義を外に向けて広げることをも考えている. これらは, 生徒の国際協力に対する彼らなりの考えである.

4 考察

以上にわたって, 国際協力・異文化理解の教育について, A高等学校の実践とその機能を見てきた.

A高等学校では, 「現代社会」の授業のほか, 「国際関係」という科目を設け, 外国人をゲストとして招き, 講義をしてもらう形で国際理解や異文化理解の教育を展開している. そこでの学校の教師の役目は, 主役ではなく, 助手役へと変わり, ゲストの授業のお手伝いをする事となっている. また, 教師の役割は授業内容のコントロールから問題の提起へとシフトしている. 教師は, 問題提起をするが, ゲストが具体的に何をどこまで喋るかはコントロールしていない.

生徒の学習は, 教科書中心からテーマ中心へ

と変わっている。こういった授業では統制されている教育知がなく、それぞれのゲストはありのまま、自分の思うまま講義をしている。生徒は自国社会の基本的な価値観を越え、ゲストの目で外国や異文化を見ることができる。

このような授業を受け、生徒はどのように影響されているかを生徒のレポート見ると、次のようなことが明らかとなった。授業に参加することで、生徒は、異文化的背景を持つ人々との触れ合い、教科書にない知識の獲得ができ、また外国や異文化に対する興味・関心をもつようになる。そしてすでに持っていた知識やイメージを正すことができ、自己再認識、自己反省や自国への肯定あるいは批判をするようになり、そのようにして共生意識、国際協力意識が形成されるようになっていく。これらは、こういった形の国際理解、異文化理解の教育が果たしている機能といえよう。

なぜこのような機能を果たせるかについて考察しておこう。

外国人ゲストに教室に来てもらうことで、教室は外国人や異文化との触れ合いの場となり、異文化学習の場ともなる。また、そこにいる学校の教師は主役から助手役になり、学習内容をコントロールしていないことで、教室という触れ合いの場、異文化学習の場は自由な空間となる。その自由な空間の中で、生徒は自国の社会が持つ基本的な価値観やものの見方に束縛されず、ゲストの目を通して、外国の映像を見たり、異文化の説明を受けたりすることで、新しい価値観、新しいものの見方を内面化していく。そこでは今まで出来上がっている見方のほかに、新しいものの見方を身につけることになっている。新しいものの見方を持つことによって、触れ合いや異文化の習得と同時に、外側からの異文化を受容し、内面化していく。また新しいものの見方で自分・自国を振り返ってみると、疑問を感じ、反省をするようになる。つまり、内側から国際化していこうという姿勢も形成されている。

このように、A高等学校の実践では、外国のこ

と変わっている。こういった授業では統制されている教育知がなく、それぞれのゲストはありのまま、自分の思うまま講義をしている。生徒は自国社会の基本的な価値観を越え、ゲストの目で外国や異文化を見ることができる。

〈参考文献〉

- 石井由理(2003)総合的な学習と国際理解教育 国際基督教大学学報 教育研究, 45 pp. 27-35
佐藤郡衛・林英和編(1998)国際理解教育の授業づくり 教育出版
中央教育審議会(1996)21世紀を展望したわが国の教育の在り方について(第一次答申) 高校教育 8月増刊号
図書教材研究センター(1994)国際理解教育・環境教育などの現状と課題 図書教材研究センター 図書教材研究シリーズ-14
張瓊華(2004)学校における国際理解教育の実態に関する考察—埼玉県事例から— 国際基督教大学学報 教育研究, 46 pp. 164
中西晃ほか編著(1991)教室からの国際化ぎょうせい
米田伸次(1990)国際理解教育展開事例集 一橋出版株式会社
米田伸次(1992)「国際理解教育研究所」の活動と国際理解教育が目指すもの 研究報告40 異文化理解教育の現状と課題 中央教育研究所

付記 本稿は平成14年度と平成15年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。